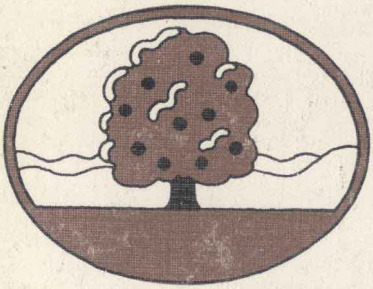
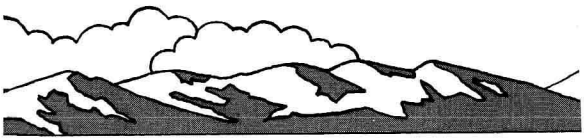
北杜夫全集——5



白きたおやかな峰
天井裏の子供たち

北杜夫全集—5



新潮社版

白きたおやかな峰・天井裏の子供たち

〈北杜夫全集5〉

一九七六年九月二〇日　印刷
一九七六年九月二五日　発行

定価一〇〇〇円

著者　北杜夫
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
東京都新宿区矢来町七一（〒一六二）
電話　業務部　東京（〇三）二六六－五一一一
編集部　東京（〇三）二六六－五四一一
振替　東京四－八〇八番

印刷　株式会社　光邦
製本　大口製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Morio Kita 1976. Printed in Japan

目次

白きたおやかな峰　5
三人の小市民　187
死　225
天井裏の子供たち　245
静謐　273
もぐら　289
初出と収録　335

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

白きたおやかな峰・天井裏の子供たち

白きたおやかな峰

第一章

ついに現れてきた。今まで夢と写真でしか見たことのない、目くるめく巨大な山塊が。地球の尾根といわれる大地のむきだしの骨格、カラコルムの重畳たる高峰の群が。

はじめは岩山であった。これまで見つづけてきた砂漠の荒涼たる色合と同質で、しかしそれが平坦ではなく、のしあがり、刻一刻とのしあがり、飛行機の高度にとどくばかりにのしあがってきた。

それは比類なき重量を秘めた殺伐たる岩の塊大な集積であった。乾燥しきり、白茶けて、ときに黒ずんで、なんの潤いもなく、なんの救いもなかった。ぞくりと落ちこんだ深い谿間には、水の涸れた川の跡らしきものが血管のようにうねっていた。実際それは不吉なほど赤みを帯び、岩と砂地の中を絡みあってうねっていた。

「けったいな山やなあ」

と、田代純二はフレンドシップ機の窓に顔をつけるようにして呟いた。

彼は隊の中でもっとも若く、京都から参加した二人のうちの一人で、他の隊員からその京都弁をからかわれていた。彼の言葉には大阪弁がまじり、というより田代弁とでもいうべきものがあって、なにか独特のおかしみを誘った。

日本でルートの研究をしているときなど、

「そりゃ危いのと違いまっしゃろか」

と、彼が口を出すと、

「京都の奴はどこか間のびしてやがるな。それじゃヒマラヤに通ぜんぞ」

「その代り、遭難もしやしまへん」

と、彼はふくれ面をしてこたえた。

田代は同じく京都隊の竹屋と共に、先発隊として一ヵ月前からカラチにきていたのだった。日航のスチュワーデスが「カラチ砂漠」と呼ぶ、ひたすらに暑く時間ののろい、砂嵐くらいしか話題のない単調な都会生活。その中での涯しない役所めぐりとパキスタン政府から登山隊につけられる連絡将校サファラーズ大尉との交際。そして待ちに待った貨物船が着き、うだるような暑熱のなかでの荷揚げの監督。隊の送った荷は、ベニヤ板の木箱を針金でくくったワイヤバンド・ボックスが百五個、総量五トン近くあった。

その間に、同じ頃カラコルムの別の山にはいる予定であった東大隊の登山許可の取消しが、日本大使館を通じて伝えられてきた。パキスタンとインドとの間の政情がますます緊迫したものになっていたためである。田代らの隊もどうなるかわからない。後発隊に早く来るようにどれほどの電報を打ったことか。田代は英会話が苦手で、そういう事務となるとすべて先輩の竹屋にやって貰うよりなかった。田代の役はそのうしろについていって、幾つかのウルドウ語を並べてやたらと頭を下げたり、「おおきに」と笑ってみせることで、しかし妙に親愛感を誘う田代の言動はパキスタン人の笑いを呼び、握手を求められ、好意の印であるミルクのどっさりはいったパキスタン茶をふるまわれたものだ。

「アッチャ・チャエ（よい茶だ）。シュウクレア（有難う）」

と、彼はやたらと頬をほころばした。

カラチからラワルピンディまでの荷のトラック輸送にも、田代は三人の隊員と共に参加した。日本大使館の人たちが、沢山の握り飯やテルモスの水を積みこんでくれる。都会を出て一面の砂漠の中を走りだし十五分もすると、先頭のトラックが突然停止した。故障か、とぎくりとする。しかし、イスラム教の祈りの時間なのであった。運転手たちは焼けつく砂の上に毛布を敷き、その上に西方に向って坐して、おのがじしさまざまな姿態で祈りを捧げはじめた。手を差しあげたり、差しのべたり、這いつくばったり、実に長い。

「これが日に五回か。とてもつきあえへんな」

と、田代は思った。

なによりも燃えたぎるような暑熱。濛々と湧き起る、乾ききった、黄いろい、実にこまかい砂塵。砂漠の砂は荷台の上にいる彼らの頭髪に真白にかむさり、五体の一つ一つの毛穴から侵入した。長い一日の行程がすむと、それでもわずかばかりのくすんだ緑のある部落に着く。よくて窓もない石と土の家の一室に寝袋（シュラーフ・ザック）を敷いてのごろ寝、さもなければトラックの下にもぐりこんでの仮眠であった。

翌日も、涯のない乾燥しきった砂漠の中の旅である。なにもかも平坦の極みで、行けども行けども空虚に殺風景で、かっと陽光を反射する砂、砂、砂の連続である。

田代は砂漠が嫌になった。つくづくと心底から嫌になった。こんなところに人間が住めるものかと思った。しかし、その広大な砂漠の中に、とにもかくにも一本の道があり、ときに砂糖きびを満載したトラックと行きちがい、ごく稀に小さな部落があった。砂漠のゴミムシよりも強靱な人間の生の営みがあった。部落に輸送隊が着くと、大人や子供が大勢集まってきてトラックを取りかこむ。パキスタン人

の子供は大半がいやに整った顔立ちをしている。高い鼻梁、澄んだ黒目をしている。それが整いすぎていて、五歳の子供のくせに早くも痛ましく成熟しきってしまったかのように見える。そして少しも笑ったりはしゃいだりしない。なにか成熟した目つきで黙々とトラックを、山積みした物資を、異国の遠征隊の動作をじっと見つめている。女たちは決して現れなかった。黒いヴェールで顔を隠した女は、日本人が近づくと足早に逃げた。或いは遙か遠くから、こちらをそっと窺っていた。

ここは日本ではなく、まったく別の土地であり、別の人種の世界なのだと、カラチ生活一ヵ月の田代も改めて思った。ともかく彼は一刻も早くこの焦熱の砂漠から脱けだしたかった。どんな小さな山であれ、大地の隆起が見たかった。どんな細いものであれ、水の流れが見たかった。そしてもう一つ、鮮やかな緑を……。日本の低い山々、そこでは今ごろどれほど美しく、こうして思い返してみると胸を締めつけられるほど美しく、しっとりと潤いに満ちて、樹樹の緑が微風に揺れていることだろう。

だが、あの暑い、つらい、救いのない旅もようやく終った。他の隊員も飛行機でラワルピンディに到着した。そしていよいよ、カラコルムの登山口に当るギルギットまでの飛行が残されるばかりとなった。

ところがこの飛行機がなかなか飛ばないのである。カラコルムの高山の間を縫ってゆく航空路なので、少しでも雲があると欠航になる。しかもそれが前もって知らされない。彼らは朝から準備を整えて、飛行場へ行って待っている。相変らず晴れわたった空には太陽が白い円盤となってぎらぎらと光り、雲のかげすらなく、飛行の障碍(しょうがい)となるものは何もないと思われる。だがそうしたじりじりした待機の果に、午後も三時ころにもなって、係員がのろのろと「今日はノー・フライト」と告げにくる。疲れきり憤慨して、安ホテルへ引きあげる。それが五日間つづいた。

「インシ・アラー（神の御心のままに）」

と、隊員たちはやけになって怒鳴ったりしたものだ。

だが、それも終った。腹立たしい厄介事は、ついに終り、新しい本番の山への旅が始められようとしている。こうして今、フレンドシップ機の座席に夢でなく坐り、機は山の気流の影響を受け、こまかく上下しているではないか。

窓外には、まがいようのない山があった。カラコルムの山、世界中の登山家たる者の夢の象徴である高峰が。

田代は目をこらした。砂漠の旅にひび割れた口を半開きにして。

山であった。日本には決してない山であった。起伏し、のしあがり、突っこみ、重畳と連る岩の殿堂であった。太

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

古の地球の思いがままの傲然たる隆起であった。そして前方に、白く輝くものが見えてきた。架空の、お伽の世界のような雪山の連り。すぐ下方の荒んだ岩山にも白いものが点在し、それが次第に殖え、やがて視野は、より白く、その上にも又より白くなっていった。

田代はどす黒く汚く日焼けした腕で、ごしごしと目をこすった。ふいに思いもかけず涙が溢れでてきたからだ。白く輝くものがぼうっと滲み、腕を目から離すと、それはもっと白く、更に輝かしいものになっていた。

「とうとう来たんやなあ」

それから彼は涙なんぞこぼした羞恥の念から、チューインガムを口にほうりこんで、力一杯にくしゃくしゃに嚙んだ。

田代の前の座席にいた増田は、このとき慌しくカメラをかまえていた。つづけざまに三、四枚シャッターを切った。

すると、耳元でなにか英語の声がした。パキスタン人にしては色白のスチュワードが、体を乗りだすようにして手を横にふっている。

「撮影は禁止されている。国境が近いから」

という意味らしかった。

「マウンテン・オンリイ」

と、増田は言った。

「山を撮るだけなのだ」

「ノオ」

相手はきびしい顔を更に横にふった。増田はむっとしてカメラをエア・バッグにしまい、日本語でこう吐きだすように言った。

「国境なんぞ知るものか。こちとらは山だけが目的なんだ。このわからず屋のひょうたんぼくめ！」

元来が彼は気短かだった。隊員の中でもっとも肥満した体軀をもつ彼は、その気性をむきだしにして、遠征準備の期間、寝袋の型、ハーケンの大きさ等について、他の隊員とやりあってきたものだ。

「おい、写真はいけねえとよ」

と、彼は後方の座席にいる隊員をふりむいて怒鳴り、なおさらむっとして、次には喰いいるように窓外の雪山を眺めた。

すでに、見渡すかぎり純白の世界であった。ところどころ露出した岩肌が、その白銀のひろがりを一層きびしい魅するようなものにしていた。

すぐ横手にそびえる峰は、機の高度より遙かに高かった。目を奪う大氷壁が、じりじりと移動してゆき、またもっと凄じい、鑿（のみ）で削ったような、青光りする氷をこびりつかせた岩壁が現れてくる。

想像を絶した広大な土地のひろがりのようであった。そこに群り立つ峰々も予想を超えた高さと大きさを示していた。そこらのなんでもない峰がおそらく六千メートルの標高を有していることだろう。カラコルムには七千メートル峰、八千メートル峰がごろごろしているのだ。

ぞくりとする美々しくも荘重な高峰、それに息を呑む間に、更にその奥処から、もっと高く猛々しく悽惨な峰が現れてくる。際限もない群峰の乱舞、荘厳な高山の陳列所。これがカラコルムなのだ。

「でっかい。手ひどくでっかい」

と、増田は自分に言ってみた。

ここはふしぎな世界であった。地球の古い古い荒々しくも華やかな地肌の隆起。厖大な雪と岩が、なにかを、なにか人を魅し、圧倒し、厳粛にさせるものを形造っていた。純白と黒の交錯した世界が、この世ならぬ痛みに似た何物かを訴えていた。地球という遊星の上の最大の尾根！

そしてついに、ナンガ・パルバットが姿を見せた。登山家なら誰でも写真でその峨々たる形態を目の奥に焼きつけている筈の山が。

それは恐怖を誘うあまりに圧倒的な大伽藍であった。峰が、尾根が、峡谷が、氷壁が、これまでのどの山より凄じく、巨大で、仮借なく、無慈悲であった。いま現実にその姿を見ると、どうしてもこの目が信じられぬ魔神の立ちはだかる胸郭の露出であった。機が動揺し、刻一刻、その怖るべき八一二五メートルの高峰は近づいてくる。

増田はうめいた。思わず腹の底からうめき声を発した。それは闘志と、いくらかの恐怖を含んでいた。

「ごっつい山やなあ」

と、こちらでは田代が薄く口を開けていた。

「あんな山、登れまっしゃろか」

もとより彼も承知している通り、ナンガ・パルバットは一九五三年にすでに登頂されていた。といって、攻撃者に対してこれほど犠牲を要求した山は史上にない。八回の遠征に死者実に三十一人。

最初にこの山にとりついたのは、一八九五年、ママリー、ヘースチング、ノーマン・コリという三名のアルピニストであった。南壁は近づきようがなかったため、北西斜面を試みた。八月二十四日、ママリーは二人のグルカ兵を連れてディアミール氷河上方の岩稜を越えて登っていった。そのまま帰ってこなかった。

次にドイツが大遠征隊を送りだしはじめ、遭難者すらを乗りこえて攻撃を強行したが、そのたびに敗退した。ナンガ・パルバットは何喰わぬ顔をして死者を呑みこみつづけた。この山はドイツ隊の執念の山となり、第五回目、一

九三八年のドイツ隊の主力は、七月二十二日、頂上を目前にする稜線に立った。四名のアタック隊が出発した。白い世界の中でパウル・バウアーは立ちどまった。彼の目の下には、前年の攻撃隊の二人の死者が眠っていた。友人ヴィリー・メルクルと、ポーターのゲイ・レイとが。うっすらと雪と氷におおわれて、静かに。

メルクルのポケットから一通の手紙が見つかった。

「七月十日、第七キャンプ

第六および第四キャンプの間にいるサーブ達に、特にドクター・サーブへ。下降の途中ウリーを失ってしまい、われらは昨日来、ここに横たわっている。二人は病気だ。第六キャンプへ向う試みは、身体の衰弱甚しく失敗に帰した。わたし、すなわちヴィロは、おそらく気管支カタル、アンギーナ、インフルエンザにかかったものと思われる。バラ・サーブは身体全体の衰弱顕著で、手足は凍傷に侵されている。われわれは六日間暖いものはなにも食べておらず、ほとんどなにも飲んでいない。

なにとぞ、ここ第七キャンプにあるわれらを救助されたし。

ヴィロおよびヴィリー」

四人のドイツ人は、二人の動かぬ友人を万年雪の墓穴に横たえ、攻撃を再開した。だが、ナンガ・パルバットは嵐をもってそれに酬い、彼らは退却した。その後、一九三九年のドイツ隊、一九五〇年の英国隊にも、ナンガ・パルバットは一仕事、つまりたわやすく人命を呑みこむことだけを果し、頑として山頂をあけ渡さなかった。

この山の登頂には、奇蹟が、超人が必要であった。一九五三年、一人のインスブルック人がこれをやってのけた。その名はヘルマン・ブールである。

一九五三年七月三日午前一時半、ブールは最終キャンプに同僚の一人を残し、単身出発した。凄じい孤独の戦いのち、夕刻七時、彼は忌わしい伝説の山の頂きに立った。しかし、下降はより困難であった。夜がきていた。頂上から二百メートルと下らぬところで、絶壁に背をもたせたまま、ツェルトもザックもなく、山頂に置き忘れてピッケルもなく、一方のアイゼンも失われてしまってなく、なんの食糧もなく、この鉄の意志の男は死と直結した夜を堪えた。午前四時、彼はふたたび下降を開始した。こうして、ブールは、それまでに三十一人の犠牲者を呑んだ悪魔の山、地獄の山、人喰いの山の頂きを踏み、そこから生きて戻ってきたのだ。

「ヘルマン・ブールか」

増田は呟いた。

その気性からおして、彼がブールに憧れるのは当然であ

った。山男というものはブールのようであらねばならない。鋼鉄の意志と鋼鉄の肉体。

「おれにもブールのそれの半分くらいのものはあるだろうか？」

増田はじっと、遠ざかりゆくナンガ・パルバットの傲然たる山容を見つめた。

超人ブール。彼は一九五七年、ブロード・ピークにも登り、二つの八千メートル峰の頂上を極めた唯一のヨーロッパ人となった。そしてその足で七六五四メートルのチョゴリザに挑戦、七三〇〇メートル附近で天候悪化のため引返すとき雪庇から落ち、その強烈な生涯を終えた。彼はクルトと共に頂上へ向ったのだが、ブール自身の提案でザイルをつけていなかった。翌年、日本のチョゴリザ登山隊が六四〇〇メートル附近で彼の最終キャンプを発見した。側面に雪をかぶっているが、テントだけはまだ立派に立っていた。一年の風雪が、茶の布地を灰色に変えていた。吹流しの絞り口を苦労してあけてみると、下は一面の青氷で、青い寝袋が固く凍りついていた。その上に黒い小さなノートが二冊のっていて、こまかいドイツ語の走り書きが見られた。一冊はブロード・ピークの登頂日記で、それによると彼はその山をほとんど駈け登ったかの感がある。周囲には三食分ほどの乾パン、サーディンの罐詰一個、ポリエチレンのびん入りの蜂蜜少量、防寒帽、空罐にはいった化粧品とロールフィルム一本、食器、ガソリンバーナー、それですべてであった。

彼、ヘルマン・ブールは、たけだけしく生き、獅子のごとく登りに登り、瞬時にして死んだのだ。

「奴は男だった。彼こそ山男だった」

増田はじっと、窓外の美々しい山を見た。

ナンガ・パルバットが後方に去ると、山々の標高は減じてきたが、目のとどくかぎり真白な世界となった。飛行機のかげが、斜め下方の雪原にくっきりと映って移動してゆく。白い雪、比類ない純白の雪と氷。

後部座席の窓際にいた副隊長の久能は、田代や増田のように激しい感動はひき起さなかった。彼はもう少し落着いていた。なぜなら、彼は一九六三年の夏に、京都の竹屋と共に、この地を予備調査に訪れたことがあるからだった。ただ持続する内奥のひそやかな昂奮はあった。

「とうとうおれたちはみんなでやってきた。これからが本番だ」

手ですくいたいほど浄らかな雪原、なだらかな谿間を見下ろしながら彼は胸に呟いた。

同時に、副隊長である久能は、頭の片隅で忙しくこれからの予定のことをも考えていた。多忙の小滝隊長は、ドク

ターの柴崎、マネージャーの小倉と共にまだ日本を発たずにいる。隊長が追いついてくるまで、隊の全責任は彼の肩に掛っている。

金のこと一つにしてもおびただしい苦労であった。パキスタンの一ルピーは日本円にしておよそ六十三円だが、米ドルから銀行でこれを公定値で替えるのと、闇で替えるのとでは大変な相違がある。公定では一米ドルが四・六ルピーにしかならぬが、カラチの闇相場ではその二倍から三倍になる。といって入出国のときの所持金申告はうるさいから、これだけの遠征隊が使うくらいの金額は正式に替えておく必要がある。来るとき久能は交換率のよい香港の両替屋でかなりの額の米ドルをルピーに替えてきた。そのとき彼は単にルピーと言った。すると、それだけのルピーを捜して駈けずりまわった両替屋が持ってきたのは——すんでのところで危く気がついたのだが——インド・ルピー紙幣であった。ふたたびパキスタン・ルピーを集めさせる冷汗をかく気苦労。いま久能の脇にある黒カバンはかなりふくれているが、大半が一ルピー紙幣と五ルピー紙幣で、総額はあと三千ルピーしかない。山麓で雇う筈のポーターたちは釣銭など持たぬと聞いた。そのために多量の小額紙幣を用意してきたのである。

それにしても、あとの金を持って追いついてくる筈の隊長がくるまで大丈夫であろうか。ギルギットから目ざすディラン峰の山麓までのジープは一台いくらで雇えるか。不足しているケロシンはいくらで買えるか。もういくらなんでも日本を出発するであろう隊長たちはうまく高率で闇金を買ってきてくれるであろうか。なにしろ彼の隊は貧乏で、ぎりぎりの予算なのであった。一ルピーでも率のよい闇金に頼り、無駄は一切はぶかねばならなかった。

そんなことより、あとの機でくる筈の連絡将校、羽瀬、関谷、竹屋らの隊員はうまく飛行機に乗れるであろうか。物資のすべてがギルギットに着くのはいつになるであろうか。

その一方、久能の山に対するひそやかな昂奮も相変らず持続していた。ついに彼らがカラコルムにやってくるまでの、数年のことがいやに遙かな昔のことのように思い返された。

久能が属するケルン山岳会は、関東が本拠地だが京都にも支部をもつ、歴史のあるかなり大きなグループである。一九六〇年、その四十周年の祝賀の席で、ヒマラヤ遠征の話が冗談のように持ちだされた。もちろん未登峰をやるのだ。あの海のものとも山のものともつかぬ夢のような時代が一番愉しかったのではないか。みんなでありとある資料をよみ、現地食であるチャパティとやらを試作して悦に入

って食べたりしたものだ。一九六二年、ガルワール・ヒマールのティルスリイという七千メートル峰を目標とし、正式にインド政府に登山許可申請書を出した。計画書を関係方面に配附し、全日本岳連の評議会で立候補を表明した。だが、中印国境紛争のためか不許可の公文書が外務省経由でもたらされたときは、隊員も決りかけていたときだけに落胆も大きかった。ついでアプローチの長いネパールよりもカラコルムに目をつけ、K6という七千メートル峰に申請を出し、翌年の夏休みを利用して教員の久能と竹屋が予備調査をかねてパキスタンに飛んだ。するとラワルピンディの外務省でもカシミール省でも、そんな山は聞いたことがない、地図にもないという話である。結局ラカポシの西方にあるディランなら許可しようという言質をとって引上げた。また十何部の申請書のコピーの打ち直し。しかし彼らは本格的に準備体制にはいった。隊長として、東大山の会OBでありケルン山岳会の顧問でもある小滝をかつぎだすことに成功した。小滝は旧制松本高校時代からの山男であり、欧州の山、たとえばマッターホルンなどにも登っていて、隊の統率者としてこのうえなかったし、小滝印刷株式会社の社長として実業界にも顔が利き、その顔が資金集めにはぜひとも必要なのであった。多数の応募者の中から隊員もほぼ決った。関東側から七名、京都側から二名。その年の暮、小滝隊長は商用で欧州へ行ったとき、以前ディランをやって不成功に終ったドイツ隊隊長、ドクター・シュナイダーに会って地図や記録を貰い、帰途はカラチに寄って「許可がおりるのは太鼓判を押してもよい」と言われて帰ってきた。一同の士気は大いにあがった。ところが、その許可がついにやってこない。一九六四年度のディラン登頂許可はオーストリア隊――彼らも結局失敗した――におりてしまったのだ。そのことは今度こちらにきてはじめて知った。いつまで経っても音沙汰がないので、みんなは半分諦めかけた。すると昨年の暮、一九六四年の暮もおしつまって、いきなり正式許可が舞いこんだのだ。

そのときの複雑な心境を久能はよく覚えている。待ちくたびれ、あまりに長く期待しすぎていたせいか、ふしぎに歓喜の念はなかった。なにより出発まであと数ヵ月しかない。それまでの慌しい繁雑な準備のことを考えると、むしろ億劫でしんどい気すらした。

「いよいよ行かにゃならんな」

彼は、自分にひとこと、そう呟いたものであった。

副隊長と通路をへだてて横手の席に坐っていた曾我は、スチュワードの隙を窺って幾枚も撮したカメラをそっと隠した。いま、高峰はすべて背後に去りつつあった。

彼もまた初めて見るカラコルムの山群にすっかり圧倒さ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.